

# 一人ひとりのニーズに応える支援を探って

北九州市立星ヶ丘小学校

野口 克子

## 1 はじめに

### ○学校の概要

星ヶ丘小学校（八幡西区星ヶ丘2丁目7番1号）

26学級(特別支援学級 1学級)

### ○学級の様子

あおぞら学級（知的に遅れのある特別支援学級）

在籍児童 8名（1年2名、3年1名、4年1名、5年2名、6年2名）

少人数指導教員 1名

### ○担任紹介

4年前まで通常学級担任をしていたが、病気治療のため担任外になった時に特別支援学級に関わった。その時に様々な支援法があることを知り、「もう少し配慮していたらもっと伸びたであろう」と思われる子の顔が何人も浮かんだ。そこでもっと特別支援教育について知りたいと思い、本格的に特別支援教育の勉強をすることにした。現在、支援学級担任3年目である。

## 2 構造化

### ○教室の環境整備

教室は7通りに使えるように配置している。

①  サイドテーブル

②  1年生専用の棚

③ 

④ 

⑤ 

⑥ 

⑦ 

- ① 全体学習の場：教師は丸いすに座って対応している。隅の机をサイドテーブルとして使用。
- ② 個別学習：1年生は一斉学習ができないので、個別学習をしている。棚も1年生専用を用意している。
- ③ 個別ブース：周囲からの刺激を遮断して個別に学習したい時に使う。
- ④ 共同作業スペース：給食時、作業時に使用。机には児童名を貼って席を分かりやすくしている。
- ⑤ リラックスルーム：靴を脱いで横になったり、読書をしたり、カルタやトランプなどをしたりしている。
- ⑥ カームダウンエリア：3方向が遮断されているので、一人になりたい時や着替えに使っている。枕と毛布を置いている。Bさんは、情緒が不安定な時に「泣いてもいいですか」「リラックスマールームに入ります」と教師に伝え、了解を得て使っている。
- ⑦ パソコンコーナー：教師の机の横を定位置とし、名刺作成や教育用ソフト「ランドセル」を使っている。

### ○視覚提示



内線電話の取り方



教室の鍵の開け方

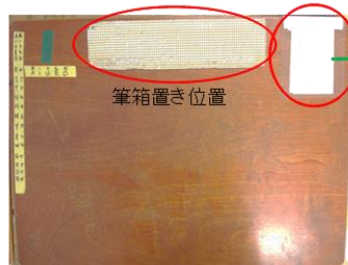


- ・棚には写真を貼り、定位置が分かるようにしている。
- ・ハンカチや箸袋も定位置を決めると、子どもが一人で準備片付けができる。
- ・廊下の右側通行表示は、児童委員会発案。

### ○机上の視覚提示



数が苦手な子の机の上に数字とブロック置き場のテープを貼る。



- ・ローマ字を覚えていない子の机に母音と子音を書いたテープを貼る。
- ・筆箱の定位置に滑り止めを貼る。
- ・1時間の学習のスケジュールをはさむためのビニルをつける。

学習スケジュール  
1.おんどく  
2.テスト  
3.おけいこ  
4.ドリル  
5.プリント  
1まい



- ・姿勢よく文字を書くための左手の位置確認の手形を貼る。
- ・負けたときの態度を図に描いておく。
- ・目標についてフィードバックできる「頑張りシール票」をはさむ。

### 3 「ひまわり学園」からの引き継ぎ

「ひまわり学園」在籍時に就学相談で「特別支援学校」と判定を受けたC君が入学することになった。そこで、本人が困らずに学校生活がスタートできるようにと思い、「ひまわり学園」に連絡を取り、C君を2年間担任していた先生と引き継ぎを行うことにした。先生が来校してくださり、以下の助言を受けた。

①トイレが教室から遠すぎるので、トイレまでの導線を作る。(写真①)

…「ひまわり学園」では、トイレは教室の横にあるようだ。確かに、C君が体験学習に来た時、トイレに行こうとして隣の教室の扉を開けたことがあった。そこで、教室-トイレ間を白テープでつないで道筋を作った。

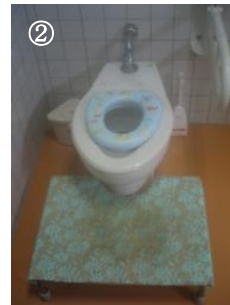
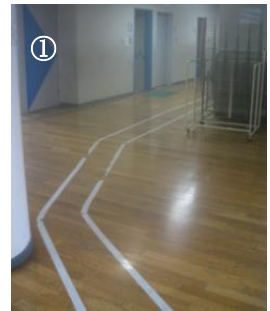
②学校は大きく、教室も多いので、教室扉には本人の顔写真を貼る。…入学して数日で教室に迷わず帰ってこれるようになったので、現在は顔写真を外している。

③文字がわからないので、C君の棚や持ち物には顔写真を貼る。

④C君は体が小さいので、トイレに台を設置し、小さい便座を用意する(写真②)。教室での机の高さを教えてもらい、机の下に足置きを置く。しっかり座れるように、いすに滑り止めを貼る。(写真③)

⑤スケジュールを視覚的に分かるようにする。(写真④) …「ひまわり学園」で使っていた写真によるスケジュール提示を見せてもらい、同じものを用意した。その後は、使う教材を新しくするたびに写真を撮ってカードを用意した。

スケジュール提示等「ひまわり学園」で受けていた同じ支援を学校でも取り入れることで、本人が混乱なく学校生活をスタートできた。



### 4 学習

#### ○ビーズ数え(算数科)

1年生は入学当初、3までの数が理解できなかったもので、手指・目・言葉の訓練も兼ねて、ビーズ数えを取り入れた。入れ物に書いてある数字の数だけ、ビーズを入れる。はじめは3の数までを練習した。3までを理解するのに2週間かかった。それから4, 5, 6と数を増やしていき、1学期中に9の数までを理解することができた。

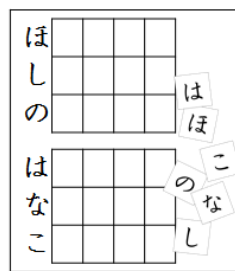
通常学級の保護者が5月に「自分の子どもが数の理解ができていない」と相談に来られたので、同じものを作り練習方法を説明した。この子は7月に「数が分かるようになった」と効果を喜ぶ連絡があった。

夏休みに、10までの数を数える練習を宿題にした。その結果、10までの数を1回で数えられるようになり、数の大小も分かるようになった。



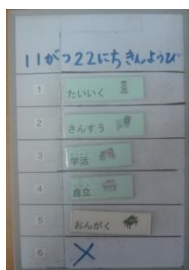
○文字の導入（国語科）

まず、自分の名前を読むことを練習する。「書く」ことだけでなく、「マッチング」から入り、文字の並べ替え、家族の名前を読む、と「読む」ことを重視する。読めるようになってから、白抜き文字で書く練習をしていく。



○見通しを持たせ、安心して「学習」に参加できるようにするために

発達障害の子にとって、初めてのことは「見通しが持てない」「ゴールが分からない」ためにとっても不安が大きい。不安になると、ブツブツ言ったり、机をこつこつ叩いたりする。そこで時間割・スケジュールボード・手順書を使って子どもに見通しを持たせて、安心して学習が進められるようにしている。



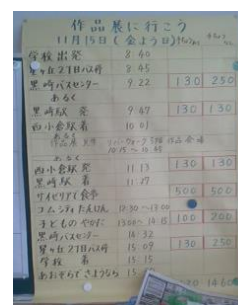
個別スケジュール



学級内スケジュール



月間スケジュール



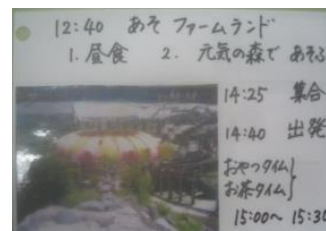
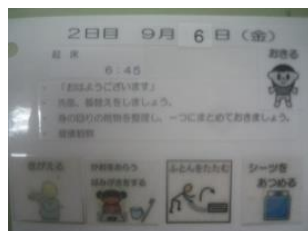
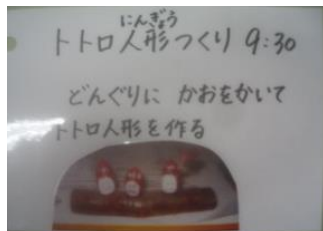
校外学習スケジュール

中でも特に学校行事を成功体験として終わらせ、自信につなげ、さらに次の行事に取り組ませたいと思っている。そこで

①スケジュールカードを作る

行事ごとに「何をするのか」「どんな流れになっているのか」が分かるスケジュールを作って、見通しが持てるようにしている。スケジュールは、下見に行った時の写真などを使って作る。

このスケジュールは、通常学級の子にも好評で、「ちょっと見せて」と見に来ていた。通常学級の子も、見通しが持てることが安心につながることが分かった。



② DVD 視聴

「運動会」「学習発表会」「連合音楽会」等の行事は、前年度のビデオを見せることで、疑似体験になる。学習課題が早く終わった時の時間を利用して、少しずつ見せた。



○見通しを持たせ、安心して「宿泊を伴う行事」に参加できるようにするために

「宿泊行事」は、発達障害の子にとって大変ハードルの高い行事である。D君は5年生の自然教室の時、下見をして納得していたが、不安で一晩中玄関に座って泣き続けるということがあった。そこでD君の経験を踏まえ、家族の協力を得て、事前体験を取り入れた。

①5年生は、2学期の自然教室に向けて、夏休みに親子で見学に行ってもらい、食堂・風呂場・部屋を実際に見ることで本人が安心して参加できた。

②修学旅行の場合は、夏休みを利用して家族旅行で修学旅行コースを経験してもらった。ホテルも修学旅行の予定のホテルを選び、本人の泊まる予定の部屋に近い部屋に泊ってもらった。そのかいあって、修学旅行を成功体験として終えることができた。

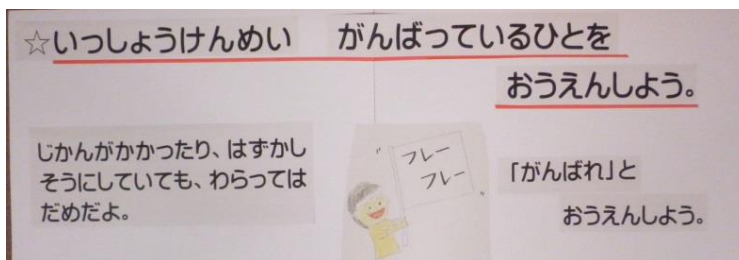
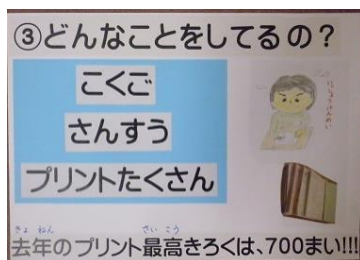
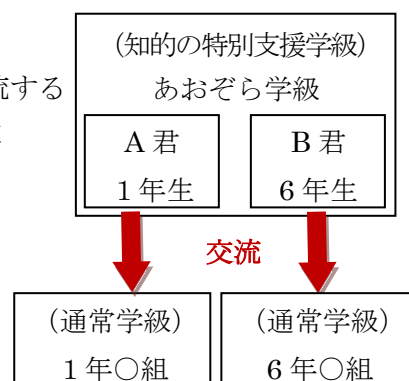
③修学旅行の前に、八幡ロイヤルホテルでお金の使い方を学習した子もいる。ホテルの土産コーナーで、弟へのキーホルダー・家族へのおだんごなどを3,000円以内で買う経験をした。

## 5 理解し合うために

特別支援学級児童は、同学年の通常学級との交流学习をする。交流するにあたり、子どもの特性を交流学級の子どもにも先生にも正しく理解してもらうことが1番大事だと考えた。苦手さを持った発達障害の子が、交流学級の中で子どもたちと仲良く過ごせるようにするために以下の取り組みをした。

○「学年はじめ集会」に「あおぞら学級紹介」を組む。

- ・子どもたちの得意なこと・苦手なことを説明する。
- ・一緒に歌ったり、ゲームをしたりする活動を通して知ってもらうことから始める。



○「紙芝居」で苦手さを説明する。

E君は、小さい時から音に敏感で、教室の雑音になれず、交流ができなかった。しかし、この苦手さが交流学級の子どもたちにはなかなか理解ができなかった。

そこで、前担任が特性を分かりやすく本に表したものを紙芝居に作り替えて説明したところ、運動会や集会で大きな音が出る時、「今からピストルが鳴るよ」「先生が笛をふくよ」等と子どもたちが本人に教えてくれるようになった。交流学級の先生も、教室で大声で叱らなければならない際には、本人をそっと教室から出して特別支援学級に帰してくれるなど、E君がパニックにならないように配慮をしてくれるようになった。



○口頭注意を視覚提示に替える。本人の特性を生かしたルールを作る。

F君（特別支援学級→通常学級）は、毎時間自分の世界に入って絵を描いたり、発声したり、歌ったりすることが目立ち始め、担任からの声かけが多くなった。そこで「書く」「写す」等の活動指示カードを作り、机の上に置いた。視覚提示で本人への注意も減り、大変効果的だった。



しかし、好きなウルトラマンの歌を授業中に歌うことは続いていた。そこで、「歌は、先生や友達が『歌ってください』とお願いした時だけ歌う」という約束をした。歌うことで情緒を安定させていたF君は、授業中は歌うことを我慢して、休み時間になったら「先生、ぼくにお願いしてください」と要求してきた。学級の子どもに同意を得ながら歌ってもらった。それを続けていくうちに、F君の不安そうな様子を見ると子どもたちの方から「歌って」と本人に話しかけるようになった。F君が安心する関わり方は、子ども達の方が上手になった。

○具体的な関わり方を掲示する。

4月に転入してきたA君の特性は、

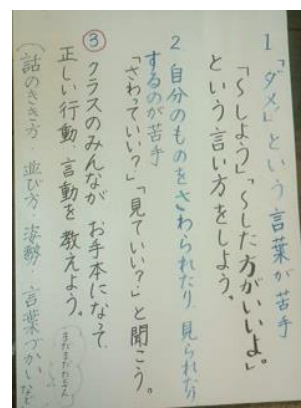
- ・自分の物を触られることが苦手
- ・「ダメ」という言葉が苦手
- ・人に触られること・声をかけられる・見られることが苦手
- ・勝負にこだわる

で、苦手なことに会おうとすぐに手が出ていた。また、転入直後で慣れない環境に戸惑っていたのか、学校中を走り回り、どこにいるかわからない状態が続いた。いろいろな学年から「叩かれた」という苦情が毎日のように来ていた。

そこで、交流学年の子どもたちに「こういうふうに接したらうまいよ」とA君との付き合い方を具体的に教えた。

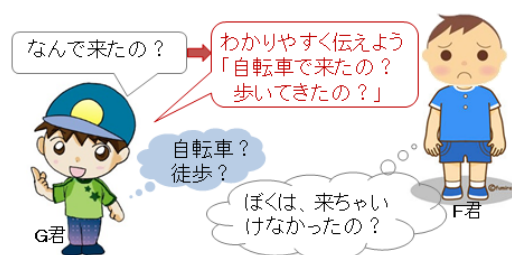
しかし、トラブルは続いたので、再度、交流学級に説明に行き、A君への接し方を紙に書いて、教室内に掲示してもらった。

現在は教室から飛び出すことがなくなり落ち着いている。給食の準備が他のクラスに負けたくないA君は「早く準備しよう」と交流学級児童に呼びかける。そのおかげで交流学級の子ども達が手早く準備できていると交流学級担任から喜ばれている。



○トラブルを理解を深めるチャンスに変える。

F君がプールへ行ったとき、G君から「F君、なんで来たの？」と言われ、F君は何も言わずに立ち去ってしまった。帰宅後、F君は「『何で来たんか』と言われた！」と大泣きした。その連絡が翌日母親から入る。担任が子ども達に状況を聞き、G君は「自分たちは自転車できたが、F君はどうやって来たのか」と聞くつもりで言ったことが分かった。その状況をF君の保護者に伝え、理解してもらった。これを機会に、F君に話す時は、「自転車で来たの？歩いてきたの？」と短く分かりやすく話すことを確認し合った。



## ○交流ファイルを活用する

「交流」は「どの時間に行くか」をあらかじめ決めているが、学校では予定変更が頻繁だ。しかし毎朝8人の交流の調整をする時間は取りにくい。また交流学級に行くと、その子の様子が見えにくい。そこで「交流ファイル」(写真①)を活用してみることにした。



星ヶ丘小特別支援学級では、荷物を片づけたら交流学級で朝の会を受ける。

その時に千代小の先生から教えて頂いた「今日の予定」(資料②)の紙を入れた「交流ファイル」を持っていく。「今日の予定」には交流学級の担任に「今日の交流予定」「学習場所が教室以外の時の場所」「来週の予定や準備するもの」「困ったこと」を書いてもらうように頼んでいる。

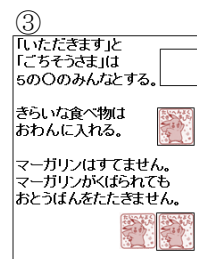
A君の交流担任は、「集会の話し合いで発言した」等できたことも連絡してくれる。その学級にも「支援が必要な子」が多数いて、「本学級児への対応が参考になる」と言ってくれるので、連携も取りやすい。

② ○○先生 11月29日 金曜日

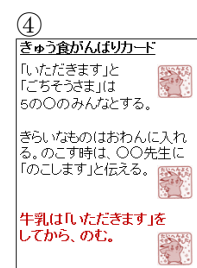
「おはようございます。」「きょうのよいいをおしえてください。」

	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	給食	5時間目	6時間目
教科	算	社	国	体		国	クラブ
準備				(館)			
記録や連絡	昨日は、2時間かかってスター集会の話し合いをしました。 スター集会でしたいことや、時間は「○○がいい」と挙手して発言することができました。 1校時は5年生と体育をかわった為、4校時に体育をします。						

交流ファイルは給食時間にも活用している。A君は転入時の4月、嫌いな食べ物があると教室から運動場に投げ捨てていた。パンも牛乳もおかずも3階から捨て、そのたびに担任が「どこに捨てたの?」と聞いて片づけていた。そこで、まず『いただきます』と『ごちそうさま』は5の○のみみんなとする「嫌いな食べ物はおわんに入れる」「マーガリンは捨てない。マーガリンを配る当番を叩かない」と守ってほしい約束を書いた紙(資料③)を用意し、できたら交流学級担任にスタンプを押してもらう方法を試してみた。本人が喜んだので、「給食がんばりカード」を作り、「交流ファイル」に入れて持たせた。本人が戻ってきたら「給食がんばりカード」を見て、スタンプがついていたら褒め、ついていなければ「残念」と声をかけた。するとA君は「次、がんばる」と言うので、特に注意することをせず、「次、頑張ってね」と声をかけることを繰り返した。時には交流学級担任から「給食のジャムを投げなくなりました」「ひよこまめを1個食べました」「今日はいっぱい手伝いをしました」等A君の様子を知らせてもらえ、その度にほめることができた。



また「いただきます」の挨拶の前に牛乳を飲んでしまったと連絡を受けたので、カードに「牛乳は『いただきます』をしてから飲む」という項目を付け加えたところ(資料④)、これもできるようになった。2学期には、苦手なおかずを投げることがなくなり、スタンプを3つもらった日には、「ぼくは今日頑張った」と帰りの日記に書いていた。



交流学級の児童も「給食がんばりカード」を見て、A君のがんばりを認め、ほめるようになった。そのほめてくれたことを交流学級担任に知らせ、お互いにより関わりができるようになった。

## 6 おわりに

特別な支援を必要としている子どもは、「手のかかる子ども」ではなく、「手をかければ伸びる子ども」だと思う。子ども達が苦手感を感じなくてすむようにその子その子に合う支援の方法を考え、特別支援学級の子どもも交流学級の子どもも担任も、共に成長していけるような学習の仕方・交流の仕方を探っていきたい。